

**研究主題** 「互いの個性や多様性を認め合い、希望をもって  
よりよく生きようとする生徒の育成」  
～「考え、議論する道德」の実践を通して～  
ふじみ野市立葦原中学校

### 1 研究主題の設定理由

本校は、『時を守り・場を清め・礼を尽くす温かな葦原中学校』を目指し、信頼関係を基盤とした指導で教育活動を行っている。「道德の時間」から「特別の教科道德」となり、毎時間の授業を大切にして、実践を積み重ねている。多くの生徒は、学校生活に前向きに取り組み、日々充実感を覚えている。

しかし、学年が上がるにつれて不登校生徒が増加する傾向にある。これは、SNSの普及やコロナ禍における人間関係の複雑化を背景とし、自分の考えあるいは生き方そのものを肯定できない生徒が増加しているからと考えられる。

そこで、道德科の授業を通じて「考え、議論する」ことで自他の考え方や生き方の違いに触れ、互いの個性や多様性を認め合う中で、よりよく生きようとする道德的实践意欲を高めていくことをねらいとして本主題を設定した。

### 2 研究の仮説

- (1) 自分との対話を通して自身の考えをまとめる機会を確保し、話合いの形態を工夫すれば、道德的価値について考え、議論が深まっていくだろう。
- (2) 話し合った多角的な見方や考え方を受け、振り返りの際に自他の共通点や相違を考えさせれば、互いの個性や多様性を認め合う態度が育つだろう。

### 3 研究の経過

時 期	内 容
4月 5月	・第1回道徳アンケートの実施・分析
6月	・各クラスでの授業実践
9月29日	・校内授業研究会 学校指導訪問に係る事前授業及び授業研究会（各教諭） <指導講評> ふじみ野市教育委員会 学校教育課 指導主事 3名
10月	・埼玉県教育局要請訪問 1年1組 宇津木 啓太 教諭 「近くにいた友」 1年2組 中山 有紀 教諭 「トマトとメロン」 1年3組 大西 遼介 教諭 「あふれる愛」 <指導者> 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課 指導主事 芳賀 一行 様

## 令和5年度埼玉県道徳教育研究推進モデル校 実績報告書

11月13日	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究発表会 3年1組 細田征吾 教諭 「世界を動かした美」</li> <li>&lt;指導者&gt; ふじみ野市立鶴ヶ丘小学校 榊原 哲也 教諭</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2回道徳アンケート実施（生徒・保護者）</li> </ul>
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2回道徳アンケート結果集計・分析</li> <li>学校研究の成果と課題のまとめ</li> <li>学校研究報告書のまとめと周知</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>講演会</li> <li>&lt;指導者&gt; (株)先生の幸せ研究所 若林 健治 様 (株)先生の幸せ研究所 大野 大輔 様</li> </ul>
2月 3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>次年度の研究の方向性の検討</li> </ul>

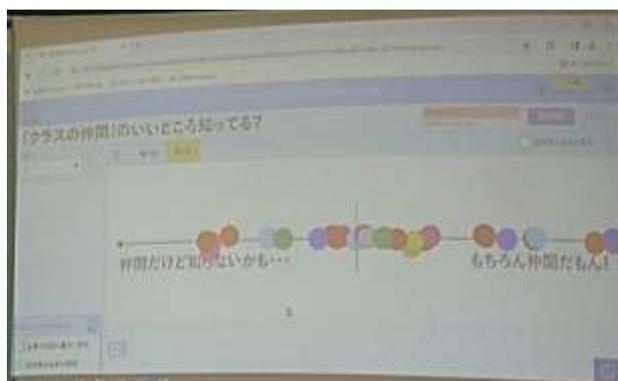
### 4 研究の内容

#### (1) 話し合いの形態の工夫に関する実践

自分との対話を通して自身の考えをまとめる機会を確実に確保した。話し合いにおいては、班やグループで話し合うことを中心に据え、中心発問について議論することを基本に授業を行うとともに、ICT機器やポジショニング機能を日々の授業に取り入れた実践を行った。

例えば、授業研究発表会においては、オードリー・ヘプバーンの伝記的物語を教材とし、「さまざまな環境の中で人間としてよりよく生きようとする大切さを学び、自分の生き方について考えを深めようとする心情を育む」ことをねらいとした授業を行った。その際、まずオードリーの「気高さ」に気付かせた。そして彼女だけでなく、生徒が心を動かされた様々な人物にも、それぞれ問題に向き合い、前に進んでいった「気高さ」があることに気づかせるため、他にも「気高さ」を持つ人物がいるかについて考えさせた。その後、ICTを用いて意見共有を行った。オードリーや様々な人物から感じる「気高さ」には、どんな共通点があるかを話し合わせることで、「自らを取り巻く環境」や「自分自身の弱さ」と正対することこそが、「気高さ」を生む源であることに気づかせた。

また、「彩の国の道徳」に記載された教材「フェンス越しに」においても、陽子さんが友達の思わぬ良い一面に出会って、心境が変わっていくことに気づかせるとともに、ポジショニング機能を用いて学級の仲間の良いところを知っているかを考えさせ、意見共有を行った。その後、考えたことについて振り返りを行った。



## 令和5年度埼玉県道徳教育研究推進モデル校 実績報告書

### (2) 振り返りの際に自他の共通点や相違を考えさせる実践

話し合い活動を多く取り入れるとともに、道徳ノートの「友達の意見や話し合いをメモしよう」の欄を積極的に活用し、自他の共通点や、相違について認識させやすくするよう配慮した。その上で、振り返り時の発問を、自他の共通点や相違を考えさせる内容になるよう工夫した。

例えば、臓器ドナーの教材では、最後の振り返り時の発問において「自他の生命の尊さについて考えたことをまとめてみよう」という発問が設定されていた。その発問に、教師が「今日グループで話し合った内容も含めて考えてみて」と補助発問を付け加えた。

このように、毎度の教育実践の中に、自他の意見を比べながら考えさせるように心がけた。

## 5 研究の成果と課題

### (1) 話し合いの形態の工夫に関する実践

5月に生徒に行った道徳アンケートでは「前の学年（1年生の場合は小学校6年生時）の道徳では、グループやペアで話し合ったり、意見や考えを出し合ったりしたことがどのくらいありましたか」という質問に対して、「よくあった」と答えた割合は1年生 53.6%、2年生 56%、3年生 59.8%であった。その後、話し合い活動に重点を置く授業を実践したところ、1月に行った道徳アンケートにおいて「今年度の道徳では、グループやペアで話し合ったり、意見や考えを出し合ったりしたことがどのくらいありましたか」という質問に対して、1年生 72.2%、2年生 68%、3年生 63.6%と数値の上昇がみられた。このことから、生徒の中にも話し合い活動の認識が深まっている様子が見え、生徒がより考えを深めることにつながったといえる。

しかしながら、「話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりとめるようになったことがどのくらいありましたか」という質問に対して、「よくあった」と答えた割合が、1年生 45.4%から 55.7%、2年生 48%から 60%、3年生 46.6%から 47.7%と、いずれの学年においても数値の上昇がみられたが、話し合い活動を行ったことに対する認識の上昇率に対して、実際に考えが深まったと感じる生徒がそれほど高まっていないととれる。これは、「とにかく話し合いをさせなければ」と、活動させることを優先したことで、話し合いの発問内容が十分に練られていなかったり、時間を十分に確保しなかったりして、会話や意見交換が深まらないことも少なくなかったためと考えられる。今後は、話し合いの内容を単純に中心発問に据えるだけでなく、二者択一で考えの違いが分かりやすい場面や答えが幾重にも考えられるオープンクエスション形式など、話し合いの内容の精選や話し合いの形態について、さらなる工夫が必要である。

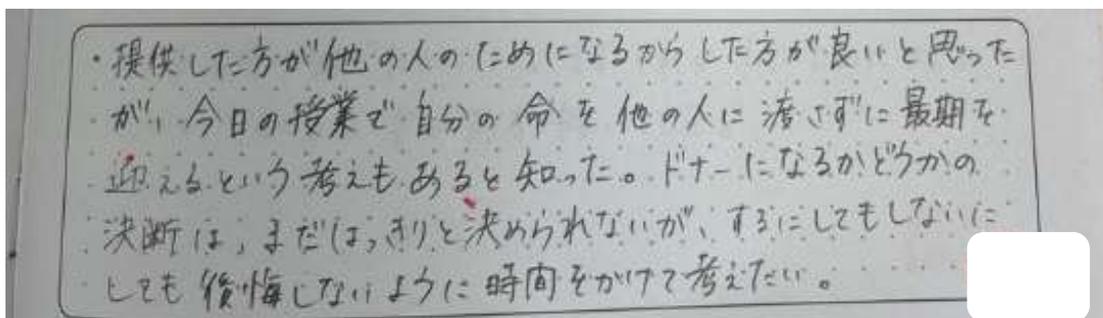
## 令和5年度埼玉県道徳教育研究推進モデル校 実績報告書

### (2) 振り返りの際に自他の共通点や相違を考えさせる実践

振り返り時の発問を、自他の共通点や相違を考えさせる内容になるよう工夫する実践を続けたことも、上記のアンケートの数値の変化に資することとなった。

埼玉県学力・学習状況調査における「規律ある態度」に関する質問を、1月にふたたび調査したところ、様々な項目で数値の上昇がみられた。特に「相手の気持ちやその場の状況を考え、優しい言葉遣いができていますか」という質問は、「よくできる」「だいたいできる」を合わせた回答率が5月の段階で1年生84.5%、2年生88.4%、3年生92.6%であったのに対し、1月は1年生91.7%、2年生94.9%、3年生98.9%であった。また、「先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、自分の考えを伝えることができているか」という質問は1年生76.7%から76.0%、2年生77.9%から88.9%、3年生75.8%から94.3%と、1年生は上昇しなかったものの、2・3年生においては数値の上昇がみられた。この結果から、生徒が一人一人の個性や多様性を認める土壌が育ってきていることを示しているといえるだろう。これは、話し合い活動の活発化によるコミュニケーションの機会の増加が功を奏していると思われる。

また、道徳ノートの活用に関しては、例えば臓器ドナーの教材において「提供した方が人のためになるからした方が良かったと思うが、今日の授業で自分の命を他の人に渡さずに最後を迎えるという考えもあると知った」と記述するなど、実際に自らの意見と他者の意見を並べ、考えを深めている様子が見られる記述が増えた。



しかしながら、すべての題材で振り返りの際に自他の共通点や相違を考えさせる実践を行うことができたわけではなく、先に挙げた生徒においても、他の生徒の意見をメモする欄に関しては活用がみられなかったりなど、まだまだ徹底できていない部分が散見される。生徒が当たり前で他者の意見を聞き、自分の意見と比べながら考えを深めていけるようになるまで、これまでの実践を丁寧に実行し続ける必要がある。